

星稜中学校のみなさんへ

『盲導犬クイールの一生』著者

石黒 謙吾（著述家・編集者）、星稜高校 OB 15 期

星稜中学校のみなさん。僕は、星稜高校を 41 年前に卒業した OB です。ちなみに、星稜中ではなく野田中出身なのですが、僕と高校の同期が、星稜中の 1 期生になります。現理事長・稲置 慎也さん、OB 会長・宮野 健二郎さんが同期です。1 学年先輩には、元・中日の小松 辰雄さんが。1 学年後輩には、衆議院議員の馳浩さんがいます。そんな時代に、みなさんと同じように小坂町に 3 年間通ったわけです。当時は、鳴和のバス停から学園に続く道はレンコン畑の中。高校は 3 階建て、中学はこじんまりとした 2 階建ての校舎でした。高校時代は「いい生徒」の真逆だったのに（笑）、あたたかく送り出してくれた星稜に感謝しています。

卒業後は東京に出たものの、喫茶店でバイト生活しつつの東京芸大浪人をしてましたがすぐに挫折して 3 年間ドロップアウトの怠惰な生活を。その後、大学ではなくジャーナリスト専門学校に入って立て直し、なんとかかんとか、もがきながら 58 歳の今まで生きてくることができました。仕事でもプライベートでも言い尽くせないほどの苦難の連続でしたが、その都度、ただ愚直に前に進むことだけを意識して、かろうじて乗り切ってきた日々でした。

そのさまざまなシーンを思い返してみれば、「誠実にして社会に役立つ人間の育成」という母校の建学の精神が心の芯にあったように感じます。とても＜社会に役立つ＞ことは成し得ていませんが、少なくとも＜誠実に＞という点は、自らへの戒めであり、人間として最重要なことと肝に命じてきました。それは、他人への思いやりにつながることだからです。誠実に返事を返す、連絡する、ウソをつかない、誰にでも明るく接する、みんなが心地よくなる状況を目指す。などなど、そういった人としてごく当たり前のことを、けっしてナメずにやる。それだけで、長い人生、必ずいい方向に進むはずですよ。

僕は、自分で本を書く<著述家>でもありますが、一方で真逆の仕事<編集者>でもあります。著者は自分一人でできますが、編集者はチームワークで著者やデザイナーと共に本づくりを推し進める現場監督的な仕事。20代前半から何万人もの人と接してきて、社会人としてもっとも重要なことこそ、<誠実であること>だと思うのです。誠実な人とは一緒に仕事をしたくなるものです。みなさんはよく一般的に言われるように<社会に出たら能力の勝負>と思っているかもしれませんが、それだけで幸せな人生を送れるわけではありません。お金持ちになっても、偉くなっても、人と心地よく過ごしていけないならば、幸福感は生まれません。これから生きていく中で、この一点だけは、「中学時代に目にした先輩の文面にあったな」と覚えておいてもらえると、同窓生として大変嬉しいです。

さて、今回、上映される映画『盲導犬クイールの一生』は、僕が原作の本を書きました。書籍が刊行されたのが、18年前の2001年。映画の公開は2004年、15年前です。僕が書店で「クイールが盲導犬になるまでの子供向け写真絵本」に出会ってから、紆余曲折あって、本になるまでに5年もかかりました。おおまかないきさつは、別紙、本の<あとがき>にあります。書店で本を開いてきたとき目に飛び込んできた<盲導犬には3人の母親がいる>という言葉が、やはり3人の母親がいる僕を後押しした初動でした。それ以降、本ができるまで、あとがきにも書いてない困難がたくさん待ち受けていたのですが、とにかくこの話を本の形にして残しておかねばという使命感のようなものは背中に感じていました。その、自分でも得体がしれない、やみくもに進ませてもらったエネルギーは、愚直さ=誠実さがベースだったような気がします。

クイールの写真絵本を書店で見かけたのは32歳の時。講談社の雑誌編集部を辞して、これからどうしていかうか大きな不安を抱えながら日々を過ごしていた頃です。雑誌しか作ってこなかった身でありながら、これから書籍でやっつけていこう、しかもフリーで思い切ったものの、闇夜の手探り状態でした。そんな中で出会った本が、その後の自分の著述家・編集者としての大きな記念碑となりました。

32歳から58歳まで、著書とプロデュース&編集の本を合わせさまざま

ジャンルで 250 冊の本を残してきました。意義深い本、ヒット作も少しだけ残せてきましたが、映画にもなり、今年中国でも映画化されたこの本は、盲導犬への認知度アップや寄付への貢献という観点で、社会と接点を持てた記念碑的な一冊と言えます。そこまで実感できたのは、独立まもなくにきっかけが生まれたこの本だけです。それは、僕が残したというより、初心の純粹さ誠実さが導いてくれた天の恵みだと思っています。それが、この本に対しての自分でも呆れるような粘り腰をもたらしてくれたんだと述懐します。

とりとめなく長くなってすみません。この本以外にさしたる仕事を残してはきておりませんが（今のところは笑）、映画になった本を残した人間が同じ星稜人であると、これからの人生でふと思い出してもらえるときがあったら著者としてというより、同窓生として大変うれしいです。

長年、野球やサッカーをはじめ、星稜生の活躍に心華やぎ、誇りに思い、楽しく過ごしていること、時が経てば経つほど心から母校に感謝の湧いてきました。みなさんも、長い人生、しんどいことが9割なはずですが（笑）、星稜魂と誠実さという言葉に胸に刻み、いつも明るい気持ちで、「希望に生きる我らかな」と軽やかに歩いていってください！

.....

『盲導犬クイールの一生』

あとがきより

僕が子どものころ一緒に遊んだ雑種のジョンは障害を抱えた犬でした。ジステンパーという大病にかかったために右の後ろ足がまったく動かなくなりました。その足は常に曲がったまま宙に浮いているのですが、残る三本の足でジョンはいつも元気に走り回っていました。そのけなげな姿から受けた、胸を締めつけられるような思いは、すっかり大人になってしまった今でも、僕の心のなかに残っています。

秋元良平さんの写真集「盲導犬になったクイール」(あすなろ書房)に出会ったのは、一九九四年初めのこと。そこに写っている盲導犬と使用者である渡辺さんの姿に、心が揺れました。幼いころからの自分と犬との関わり、記憶のな

かの情景が、クイールの姿に重なって見えたのです。盲導犬には「生まれの親、育ての親、しつけの親」がいるとこの本で知ったことも、三人の母を持つ自分の生い立ちと似ているような気がしたのかもしれませんが。

それから四年後、九八年の春、秋元さんに初めてお目にかかり聞いたのが、クイールがまだ生きていて、身体が弱ってきたらしいという話。生まれたときから追ってきたクイールの姿を、亡くなるまで写しておきたい、盲導犬クイールの一生を何らかのかたちで残したい、という秋元さんの気持ちを聞いて、自分にできることがあれば協力したいと強く思いました。しかし、京都の仁井さんのお宅に会いにいこうと思っていた矢先に、クイールが亡くなったのです。

クイールが亡くなった夏の日の夜、秋元さんから自宅に電話がありました。「クイールが死にました……」。多くを語らないなかに愛する犬を亡くした人の深い悲しみが感じられ、僕自身の何回かの犬との死別の記憶が蘇ってきたのです。

僕の人生に初めて登場した犬は雑種のメリーでした。メリーは息子ジョンを生んだあと病死。四歳のときに両親が離婚した僕は、目の前から急に母親が消えたという事実に対処できなかつたのでしよう。この当時の記憶といえば、毎日足の不自由なジョンと遊んでいたことしか覚えていません。やがて、父が再婚し、新しい母ができたのですが、この母とも二年はど一緒に暮らしたところで別れがきました。結核で入院し、一度も退院できないまま四年後に亡くなったのです。その間にジョンも病気で死んでしまい、ジョンのあとにもらってきたチビも、親戚の家に預けていたときに車にはねられ、事故死。幼かった僕にとって悲しいできごとが続きました。

その後、父とのふたり暮らしが始まり、毎夕、学校から帰る僕を待っていてくれたのは、テリヤの血をひく雑種のロック。父が帰宅する夜遅くまで、ロックとふたりだけの時間。一緒にごはんを食べ、どんなことでも話しかけ、テレビを観るのも、寝るときも一緒でした

犬は僕にとって、親のいない寂しさを癒してくれる最高のパートナーでした。秋元さんの写真を通してクイールに出会ったとき思ったのは、いままで僕が犬から受けてきた大きな恩を、本をつくることで少しでも返すことができ

れば・・・ということ。結局、僕は生前のクイールに会わないままこの本を書くことになりましたが、僕とクイールの間には何か運命的な絆（きずな）があったのかもしれませんが。

現在、盲導犬育成にかかる多額のお金は、国からの援助金、善意の寄付金でまかなわれています。たとえ少額でもたくさんの人たちの気持が集まれば、質の高い盲導犬を育成していけるのです。欧米のように企業から多額の寄付が期待できるといいのですが、日本の現状では、まだまだのよう。また、集まった寄付金の使われ方を公開していく努力も必要でしょう。そして、お金と同じくらい大切なのが、人材です。生まれの親、育ての親などのボランティア、訓練士など、盲導犬の育成に必死に取り組んでいる人たちのことも忘れないようにしたいものです。

どんなに優れた訓練士でも、一人が育てることのできる盲導犬の数は限られています。訓練士育成のためのしっかりした基盤をつくっていく努力も大事なことです。

また、盲導犬だけでなく、耳の不自由な人を導く聴導犬、身体的障害をもつ人を助ける介助犬、心を癒してくれるセラピードッグなど、人を助ける「アシスタンスドッグ」全体に対する理解と、育成のための協力がますます必要になってくると思います。



終わりに、この場を借りて、お礼を申し上げたい方がたくさんいます。

秋元良平さん。その写真からクイールの息づかいを伝えてもらいました。亡くなったご主人とクイールの思い出を静かに語ってくださった渡辺禎子（よしこ）さん。盲導犬のことを広く知ってもらえるならと貴重な時間を割いてくださった多和田悟さん。取材中にも犬へのい思いがびしひしと伝わってきた水戸レンさん、仁井勇さん、三都子（みつこ）さん夫妻。本当にありがとうございました。

二〇〇一年二月

石黒 謙吾

【紹介ページ】

<p>イシブログケンゴ (石黒謙吾さんの HP) http://blueorange.co.jp/blog/</p>	 
<p>公益財団法人 日本盲導犬協会 https://www.moudouken.net/</p>	